

4) カシワ＝柏

カシワはブナ科コナラ属の落葉高木で、日本各地の山野に分布する。高さ 17～18m に及び、低山地帯の雑木林を代表する木の一つである。雌雄同株で新緑の頃、黄褐色の小花を開く。新緑が美しく野趣に富んでいるところから、田舎の家では庭木として植えることも多い。葉は 12～14cm とこの仲間のものでは大きく、若葉を蒸して乾燥させたものは柏餅を包むのに用いる。葉は秋には褐色になるものの、そのまま枝に着いて冬を越し、翌春新芽と入れ代わるように落葉する。これはコナラやブナ、クヌギの場合も同様で、この仲間の一つの特徴にもなっている。このため昔から「柏落ち葉」と称して夏の季語にもなっている。和名の由来はカシキハ「炊葉」が転じたもので、昔から飯を盛るのに多く用いられたことに由来する。この他にもケシキハ「食敷葉」とか、カタシハ「堅葉」とかいろいろな語源説がある。学名は『*Quercus dentata*』で、属名はケルト語の良質の材木を意味しており、種小辞は歯状のという意味で、葉の縁に鋸歯があることによるものである。

カシワの葉は5月の節句には、今でも柏餅として食べるが、古くはホオの葉などと同様にこの木の葉に食料を盛ったり、器の代わりとしても用いられた。このため「柏」は「朴」の木の異名にもなっている。しかし一般的にはカシワがもっとも広く用いられたところから、食物を盛る木の総称ともなっている。『古事記』の応神天皇記には日向の髪長比売(カミナガヒメ)の話として次の文章が見える。

天皇(ヌマミコト)豊明(トヨアカリ)聞(キ)し看(ミ)し日に、髪長比売に大御酒(オホミヰ)の柏を握(ト)らしめて、その太子(ヒツギノミコ)に賜ひき。

豊明とは『豊明の節会』のことで『新嘗祭』(ニイナメサイ)の翌日、まず天皇が新穀を召し上がり、群臣にも賜った儀式のことである。このおり御酒が入った柏の器を皇太子に賜ったことが語られているのである。またこの時代は葉の大きく広いものを「柏」と総称していたようで、前述のモクレン科の「朴」の木、それにシダ類のオオタニワタリの仲間である「ミツナカシワ」、さらにはヒノキ科の「コノテガシワ」や「アスナロ」など、いわゆる「槇柏」の仲間では漢名では「柏」の文字が付くもの等、全てが「柏」と呼ばれていたふしがある。そしてホオの木やカシワ、アカメガシワなどは食物を盛るのに用いられ、オオタニワタリは食物を包んで蒸し焼きにするときに、槇拍類は土器で食物を蒸すときに、下に敷くものとして用いられていたらしい。

『万葉集』には柏を指すと思われる歌が3首あり、柿本人麿の歌として

秋柏(アキガシ)潤和(ウレ)川辺の小竹(シ)の芽の 人には忍び君に堪へなくに
というものがあり、西行法師は1190年頃に成立した『山歌集』の中で

花のをり柏につつむしなの梨は 緑なれどもあかしのみと見ゆ
と詠っている。また『枕草子』には

かしは木、いとおかし。葉守りの神のいますらんもかしこし。兵衛(ヒヨウヱ)

の、督(カミ)、佐(サ)、尉(ジョウ)などいふもおかし。

と記されている。葉守りの神というのは『大和物語』で詠われている、

柏木に葉守りの神のましけるを 知らでぞ折りしたたりなさるな
という歌を指しており、柏木は皇居の守衛の任に当たる『兵衛』、『衛門』の異名
でもあり、この木の葉には「葉守りの神」がいるものと考えられていたのである。
また「督」は長官のことを、「佐」は次官のことを、「尉」は次の位の人のことを言った。
この言葉は現在でも軍隊の位を呼ぶ「佐官」「尉官」などとして残っている。

『源氏物語』には「柏木」という巻がある。柏木は頭中将の子で、右衛門の督(カミ)
の職にあったために柏木と呼ばれていた。彼はこともあろうに以前から恋こがれて
いた光源氏の正妻、女三の宮と一夜の情を交わし、女三の宮は懐妊して薫を生む。
柏木は罪の意識にさいなまれ、やがて病死する。一方の光源氏はこのことに気付いて
いたが、彼にも苦い経験があった。かつて柏木の父にあたる頭中将の愛人夕顔
を溺愛し、また時の皇帝の四の宮であった藤壺の中宮と密通して不義の子、後の
冷泉院を生ませていたのである。源氏物語に出てくる植物のイメージは、物語の
内容と極めて密接に関わるものが多いのも、一つの特徴になっている。

伊勢神宮の神事の中にもカシワの葉を流水に流して、浮かんで流れると「吉」。
沈んでしまうと「凶」とする占いがあった。これを「柏の占」といい、江戸時代には、
陰暦七月十四日に伊勢の土貢島(トクシマ)から献じられた柏の葉を流して、その
年の農作物の豊凶を占った。『明德記』には次のように記されている。

又三角柏の觶(カヅキ)とて、二見の浦の東なる、佐々良嶋と云所にて、柏の葉
を取事あり。たとへば、この嶋嶮岨(ケツ=険しいこと)にして陸地より通路なき
間、高塩のたへるとき、この嶋かげに船を浮(ウカ)めて、この柏の葉を浪の上
へかりおとす。神盃になるべきはかならずうかび、其のうつわ物にあたら
ざるは悉(トゴト)しづみて、みくさとなる。其の数をもて神盃の度数を占へり。
是を柏の占とは号す。

この他にも柏にまつわる話や言葉は多い。『柏の御膳』(カシワノミケ)は神に
供える食物を盛る器の一つで、柏の葉を折り、細い竹などでつなぎ合わせて作った
ものである。「柏に寝る」とは一枚の蒲団を二つ折りにして、その間にくるまって寝る
ことをいい、これは人間を柏餅のモチに見立てたものである。

ギリシャ神話にもカシワの木はしばしば登場する。テセウスとパイドラの話では
そのとき英雄ピリトオの槍が飛んで、カシワの幹を大地から引き抜いて戦お
うとしていた巨大なケンタウロスのペトライオスを貫いた。[中略]

三人目のケンタウロスがその仕返しをしようとしたが、テセウスがカシワの木
の杭で殴り殺した。

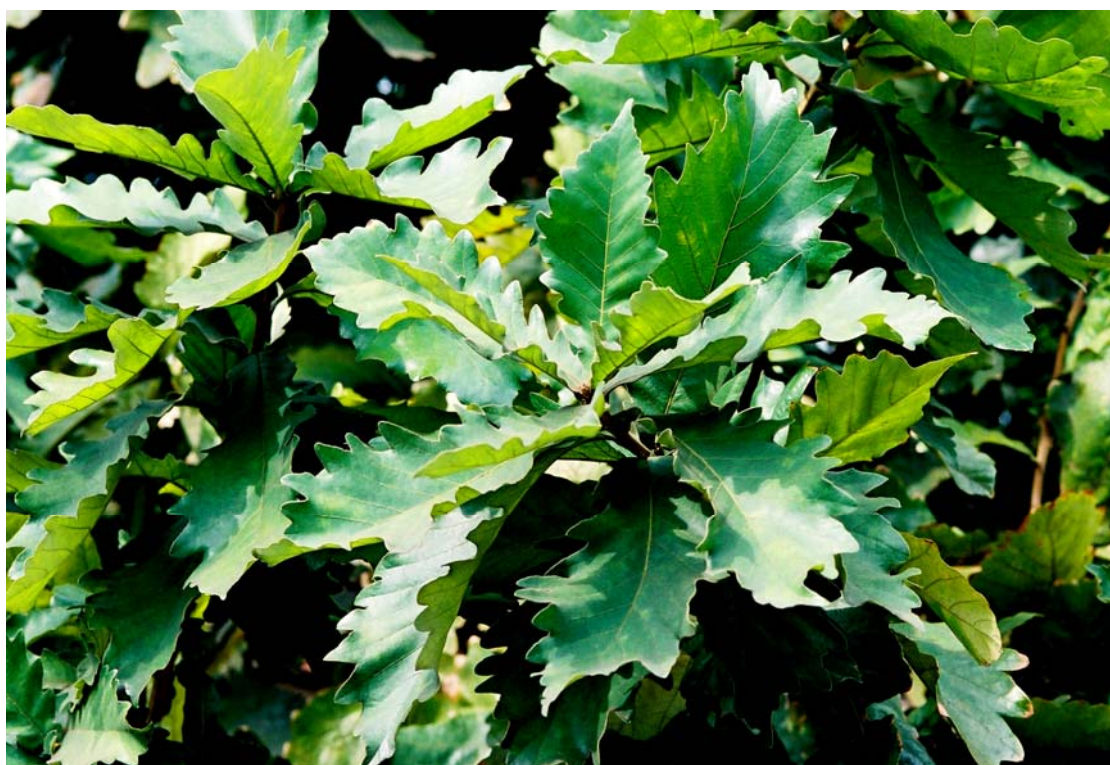
と記されており、カシワの木が普通の木ではなかったことがうかがえる。



カシワの木(さいたま市緑区)。



カシワの若い果実、まだ種子は見えていないが、やがてドングリが顔を覗かせる。ドングリの形はちょうどクヌギとコナラの間ぐらいの形のややオカメである(長野兼備ヶ原)。



カシワの夏葉、広葉樹の中でも大きい方に属し、餅などを包む(長野県諏訪市)。

[目次に戻る](#)